

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第23回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日付：11月27日（火）1日目

大学名：北京大学

氏名：高乾

今日は訪日の初日で、私たちは主に日本の交通、JALへの訪問と夕食の3つのイベントを体験した。ここではそれらを順番に述べていく。

この日の移動は多少複雑で、まずは北京から東京、そして東京から大阪に移動、その途中ではバスの乗り換えが何度あったが、印象的だった飛行機での出来事を紹介する。

JALの機内の最前列ではスリッパの提供がされていなかった。通常、最前列の乗客の足下は十分なスペースがあるため、ほとんどの航空会社ではスリッパを提供するが、JALでは提供されていなかった。恐らくスリッパは日本では失礼にあたる行為とされているからなのだろう。JALに対して最も印象深かったのは高品質の機内食であった。丁寧に作られた麺やシーフードのご飯、さらには美味しいアイスクリームなど、JALではそのサービスの質に高い要求がされており、この点は安さを売りとするアジアのその他の航空会社とは雲泥の差がある。

JALへの訪問ではまた多くの知識が得られた。私たちはエンジンの構造について知った他、二つの整備場を見学した。整備場の仕事ぶりからは、JALの安全性への重視、リスク回避への姿勢を感じた。タイヤからエンジンまでの各部品は定期的に変換もしくはメンテナンスされる。この点はとても印象深く、JALを代表とする一連の先端企業は十分な研究開発能力を持っているだけでなく、さらに人間本位で一切のリスクを防止している。この点については中国の一部の企業が学ぶべきだと思った。

最後に私たち一行は素晴らしいビュッフェディナーを体験した。日本料理はヘルシーで美味しく私はとても好きである。一般的に日本料理は値段が高いが、幸い私たちは今回の活動に参加していることで素晴らしい待遇を受けている。

初日は多くの収穫が得られた。二日目の訪問も楽しみにしている。

日付：11月27日（火）1日目

大学名：北京外国語大学

氏名：周戈

整備場見学のみならず、日本に向かう機内でもJALについては体験をすることができた。

JALの機内では、座席のテーブルが前列の座席の動きに影響されることがないため、テーブル上の食べ物などが落ちたりすることがない。

また機長は日本語で話しかけてくれた他、日本語ができない学生には英語で話しかけるなど、思いやりを感じた。

その後JALの整備場を訪れたが、航空機のいずれの場所にもこだわりがあることが感じられた。この点は日本が限られた国土資源において極めて高い効果と利益を生み出すことができる理由の一つだと思う。

この他、解説を担当したスタッフについて私は40代だと思っていたが、実際には61歳だったと知った時には、日本の「生涯現役」という言葉の意味をはっきりと理解でき、日本人の活力や社会貢献の意志に感服させられた。

日付：11月27日（火）1日目

大学名：北京林業大学

氏名：王韻玉

期待と緊張を胸に秘めた私たちは東京の羽田空港に降り立ち、訪日の旅が正式に始まった。海を渡り「丁寧に」運ばれた自分のキャリーケースのハンドルを握るまで、私は自分がすでに日本に到着したことを多少信じられないでいた。

自分の目で実際に見た日本での最初の目的地は JAL 整備場であった。航空機のジェットエンジンの動作について知り、JAL の制服を試着し、機械でグランドハンドリングを体験した他、さらにはこれまでにない至近距離にて整備場内の航空機を見学し、また航空機の離着陸の様子を観察することができた。かつて空港の厚いガラスの向こうにあった巨大な物体が突然目の前に見えるのには奇妙な感覚がした。スタッフの解説もまた分かりやすく、小学生が見学に来たとしてもきっとよく理解ができると思った。

そして最も印象深かったのは JAL のスタッフの時間への概念であった。航空教室ではまず初めにタイムスケジュールについての解説が行われた。また時計は至る所で見かけ、航空機のメンテナンスにおいても、サッカー場 4 面分の大きさの格納庫の「安全第一」の文字の下には大きな時計が掛けられていた。こうした時間や効率への重視は私たちが学ぶべきだと思った。

この他にも感動したのは至る所にあった点字で、たとえ狭い通路でもすべて点字ブロックが設置され、空港であれ整備場であれ、日本のスタッフは常に人にとって快適な距離感でゲストと向き合い、あいさつや案内そして質問への回答をしていた。これは本当に素晴らしく、人々の要望を十分に踏まえた成果だと感嘆せざるを得なかった。

日付：11月28日（水）【2日目】

大学名：北京師範大学

氏名：陳怡帆

パナソニックのデザインは製品機能自体を大きく超越している。社会が発達しているからこそこうした企業が存在し、現代における設計や製造の他、未来の生活のために設計をし、伝統や自然といった要素と電気製品を融合しているのだと思う。水を使った投影により音を視覚化するスピーカーや刺激を与えると消える照明にはいずれも比類なき巧みな構想が含まれている。日本人は万物に神が存在すると信じているが、パナソニックの製品は神を創造するかのようである。正にこうした理念や芸術性により購入者が製品を大切に、また敬うのだろう。

大阪大学での交流はまたとても素晴らしく、私は二人の中国人留学生と知り合った。その中の一人は自分の考えをしっかりと持っていて、強い自己顕示欲と場合を問わず思ったことを口にする勇氣にはとても羨ましく思った。また免疫学の実験室の見学の際、黄俊研究員は臨床を諦めた理由として、医者には病気に対して薬を与えることができるが、患者の病気の苦痛を解消することはできないという点について、彼自身何かしらの貢献をしたいと願い現在の道を選択したとのお話があった。私は彼の選択を羨ましく思うと同時にとても感服した。彼は自身の研究を愛し、また一種の社会的責任感を持っていた。そして大阪大学はその彼のために自由な学術的環境を提供している。これは本当に素晴らしいことであり、中国の大学もこうした方向性で発展してほしいと思った。

日付：11月28日（水）【2日目】

大学名：北京師範大学

氏名：龍炫彤

朝、ホテルで食べた卵焼きはとても美味しかった。今回日本を訪れる前に日本人の友人と会った際、彼女は卵焼きが一番好きだと言っていたので、その時から一度食べてみたいと思っていた。やはりおいしい！

今日は天気も良く、朝は多少肌寒く感じたが、明るい日差しが降り注いでいた。日本の空気はとてもきれいで、日中

の街中は夜とは明らかに異なる賑わいを見せ、それは中に静けさを伴った賑わいであった。

Panasonic Design Kyoto のオフィスビルは意外にも「街中にひっそりと」佇んでいた。そして中に入った瞬間、この企業に対する第一印象であるスマートさ、温かさが脳裏に浮かんだ。上層階から下層階までのオープン&セキュア対応といったドリップコンセプト、パーティーやその他のイベントが開催できる9階のオープンスペース、そして一般的なグループ間の自由な意見交換が可能なもの、一人で静かに考えをまとめられるもの、すぐに決断をするために椅子を置かないものなど8階の様々な会議室、また5階のラボでは、氷を使わずお酒を冷やす器具、「ゆっくりフェードアウトする」スピーカー、静かに持っている時だけ点灯する照明、「音を形にする」スピーカーなど、私はパナソニックの「A Better Life, A Better World」の理念を心から堪能した。

午後私たちは大阪大学を訪れた。キャンパスに足を踏み入れた瞬間、私は「うわー、きれい！流石にもみじで有名な大阪大学だ！」と思った。免疫学の講座や見学の内容のいずれも私の専攻とはかけ離れていて、中国語でも理解が難しいのに外国語ではなおの事であった。しかし大阪大学の学生達との交流では時間が経つのがとても早く感じ、お別れの際は名残惜しかった。わずか4時間の交流だったが、彼らとは仲良くなることができた。

やさしくてかわいい翼子さん、きれいで日本語が上手な王さん、ほんとうにみんなのことが大好きだ！！人との出会いは大切に作るものだ。みんなと出会ってよかった。また会える機会がきっとあると私は楽しみにしています！

日 付：11月28日（水）【2日目】

大学名：北京外国語大学

氏 名：徐浩天

今日は日本での2日目だが、正式な訪問は今日から始まった。午前、私たちはPanasonic Design Kyotoを見学した。そこでは京都の伝統工芸と現代的デザインが融合したたくさんの製品を目にし、伝統工芸の継承と時代の融合を大いに広めるとの企業の在り方を感じ、この点は中国の多くの企業が学ぶべきものと思った。見学の後、私たちは製品のデザインを体験し、グループに分かれて弁当のデザイン考案と発表を行った。皆はユニークな意見を出し、私たちは食事をしながら皆の創意に耳を傾けた。パナソニックにおいても一つ印象深かったのは、彼らの会議室とワーキングスペースであった。スタッフがあらゆる状況において自由に討論できるように、ここでは正式な会議室、家庭的スタイルのソファ、一人で外を眺めることができるソファ、そして立ったまま討論できるスペースが設置されていた。またスタッフが場所にとらわれず仕事ができるフリーアドレスのワーキングスペースに私はとても魅力を感じ、できればパナソニックで働きたいと思った。

午後、私たちは大阪大学を訪れた。午前の発表を終え、午後また新たな発表を行うことから、思考が多少追いつかなかったが、大阪大学の中国人の先輩学生や中国語を学ぶ日本人学生らがサポートしてくれた。発表は交流を促進させる手段にすぎず、グループ討論では先輩方が日本留学や語学学習におけるアドバイスをしてくれた。私はすでに3年生で、一つの重要な節目になったと言えるから、そろそろ進路を考えなければと思った。今後もし機会があれば日本で大学院に進みたいので、今から頑張ろうと思う。

日 付：11月28日（水）【2日目】

大学名：中国農業大学

氏 名：王添

もしこの日見学した企業を一言で表すとしたら、私は「自由」という言葉を選ぶ。自由は制約のない勝手気ままな意味ではなく、最も快適で自然な状態で自身の潜在能力を掘り起こし、より良い効果を挙げることである。

今日の最初の訪問先はPanasonic Design Kyotoであった。長い歴史を有する成熟した技術を持つ企業である同社は、斬新な価値観により家電を通じて世界に「くらしにもっと憧れを」の理念を発信している。このオフィスは自由な

雰囲気満ちており、フリーアドレスのワーキングスペース、開放的な会議室、静かに考え事ができるスペース、お酒を飲みながら討論ができるオープンスペース、ドリップを基にしたフロアコンセプトなどのいずれもデザインにおけるひらめきを刺激する重要な要素である。同社と工芸家が共同で生み出した製品は視覚、聴覚、触覚が融合した体験をもたらすもので、それら製品は機械的なツールではなく、使うことで生活と対話をし、使用する者に生活の中の美を感じさせ、より生活を愛するようになる。これは正にパナソニックの「A Better Life, A Better World」の理念に合致している。

二つめの訪問先は大阪大学であった。同大学の免疫学は世界トップのレベルである。お話を聴いている中、私は高校時代の生物で学んだ知識を思い起こし、ここの実験室や自由で純粋な雰囲気はとても印象深かった。先輩の紹介によると、ここでは皆が研究に専念し、論文の引用率のみで自身の成果を証明し、学術とそれ以外のごちゃごちゃした物事を一緒にすることはない。また実験のプロセスで遭遇する問題について私は先輩と討論した。私の専攻は実験を必要としないが、彼らの精神や日常の学習については相通じるものがあると思った。その後私はまた実験室における最新設備について知識を深め、さらに北京科技大学及び大阪大学の学生と、日中の学生の卒業後そして仕事への観念の違いについて討論した。

今日はたくさん自由な討論をし、これらの街が好きになった。

日付：11月28日（水）【2日目】

大学名：中国農業大学

氏名：林百欣

今日の最初の訪問先は世界に名高いパナソニックのデザイン拠点であった。9階のオープンスペースを訪れると、その素晴らしい環境と快適さには目を見張るものがあった。至る所のデザイン性は企業の創造力の高さをはっきりと示していた。その後見学した実物の製品はとても印象深かった。芸術性や実用性等多方面の要素を融合し開発された製品からは「A Better Life, A Better World」という企業のブランドスローガンが感じられた。また7階と6階のワーキングスペースもとても人間本位で、中国の企業はこれに比べると多少ずさんで単調だと思った。その後のグループワークで行った弁当のデザイン考案はとても面白かった。皆はユニークなアイデアをたくさん出し互いに交流し、皆が素晴らしいと考える意見が生まれた時の心からの嬉しさと興奮はこれ以上ないもので、こうした点もデザインにおける楽しみだと思った。それと同時に私自身もブレインストーミングから分類そして羅列さらには整理まで、これらの各段階を繰り返していくというデザインにおける考え方を学ぶことができた。

午後は今回初の大学での同年代の学生との交流で、私たちはまず大阪大学の紹介ビデオを鑑賞し、同大学が世界的視野を有するトップクラスの大学で、免疫学においては世界トップであることを知った。T細胞に関する講座を拝聴できたのはとても光栄だった。ちょうど私も生命科学分野で学んでいるため、講座を楽しく拝聴することができた。その後の見学でも私的になじみ深く、私が所属する植物保護分野のほとんどにおいて病原微生物方面の研究をしていることから、見学で目にした標本や実験室における様々な器具については中国国内のものと似ていると思った。

最後の大阪大学の学生との交流や討論においても、とても多くの収穫が得られた。皆のライフスタイルは本当に様々で、こうした違いは正に多彩な世界を構成するベースとなっており、また私たちが交流を図る理由だとも言える。面と向き合って交流をしてこそ、日本の大学や学生がどういったものなのかについて自分の中ではっきりと認識することができる。今後さらに多くの交流の機会があることを願っている。

日付：11月29日（木）【3日目】

大学名：北京大学

氏名：李南鶴

今日はインナーウェアの企業であるワコールを訪問し、その後東福寺で京都の紅葉を觀賞し、新幹線で温泉天国

の箱根に向かった。

高いコストを恐れず、高品質の設計と人間本位のコンサルティングにより顧客に最良の体験を提供するというワコールの発展モデルは学ぶべきものである。また感心したのは、ワコールが乳がん関連の公益事業に関わり、企業イメージを大きく高めていることである。また30年後に向けたワコールカプセルからも同社の時間の経過と共に新鮮に感じられる、また終始一貫した精神が窺える。塚本幸一氏の隸書は力強く私たちは感服させられた。

その後の東福寺では北京で見られなかった紅葉の様子を目にすることができた。青空に映える紅葉を見上げた時、私たちは鮮やかな色彩や自然の美しさに心を打たれたが、日本人がこの景色を目にしたときにどのように感じるのかについては知る由がなかった。この点については今回の活動を通じて知りたいと思っている。

新幹線はスピーディーで、現地時間の4時過ぎには日が落ち始め、小田原に着いた時には、明かりの中の湯本温泉の夜景しか目にすることができなかった。明日は早起きしてこの風景を觀賞したいと思う。

日付：11月29日（木）【3日目】

大学名：中国農業大学

氏名：王新宇

今日は訪日3日目で、午前私たちはワコールを訪れた。同社はインナーウェアをはじめ現在では靴、スポーツウェア、男性用インナーウェア及びその他繊維製品の事業を展開するなど巨大な産業を形成している。

ワコールでは同社の宣伝ビデオを鑑賞し、さらに展示室では同社が創業当時のインナーウェアからその後の段階的な改良を経て現在の業界をリードするブランドを構築する過程を目の当たりにした。この他、ワコールの一連の発展の過程では、科学的な研究方法を採用し、異なる年代の人々の身体データを収集しその変化の法則や頭骨の平均的データを導き出すなど自らに適した発展の手法を構築している。私はこうした点から現代の大企業におけるビッグデータの研究と運用について知ることができた。

この他、ワコールは靴やスポーツウェアといった産業に関わり規模を拡大すると同時に、乳がんの予防や患者向けの事業に尽力し、摘出手術後の患者用のインナーウェアをデザインそして製作するなど、人間本位の姿勢を示している。

また今日は東福寺の紅葉を觀賞した。ここは人が多かったが皆とても親切でとても楽しく、また北京ではこの時期には紅葉がほとんど見られないことから、私は写真をたくさん撮影した。その後私たちは新幹線で箱根の旅館に向かい、そこでは日本の優れた温泉サービスを体験し、日本特有の温泉文化について知ることができた。温泉に浸かり習慣を学ぶ過程は、私にとって身体と心が休まるものであった。

日付：11月29日（木）【3日目】

大学名：北京科技大学

氏名：趙紆羽

午前、私たちはワコールを訪れた。私は同社の成り立ちと目標にとっても驚かされた。ワコールの創業者は他人のために生きることを信念とし、その素晴らしい先見の明と創意、そして女性に美しくなって貰うとの目標によりこれまで業界をリードしてきた。それだけでなく同社はまた企業の社会的責任を重視しており、乳がんの早期発見や防止に関する公益プロジェクトに力を入れている。より優れた、身体にフィットするインナーウェアをデザインするため、同社はさらにワコール人間科学研究所を設置し、毎年大量の人体データを測定・記録している。

その後私たち一行は東福寺を訪れた。随行スタッフの事前の下見にはとても感謝している。東福寺に到着すると秋の気配が色濃く感じられた。真っ赤な紅葉は寺院をはみ出んばかりで、地形をうまく利用した日本庭園は建物を通じてそれぞれの風景を大きく見せていた。

温泉旅館では生まれて初めて浴衣を身に着け私たちはとても感激した。宴会料理もとても豪勢で、各料理からは心遣いが感じられた。そして最も印象深かったのは懇親会で、冷和華さんのダンスはとても可愛らしく、董林さんの DJ では皆が盛り上がった。わずか三日間で皆は旧友のように打ち解けていた。

中国国内の温泉とは異なり、日本の温泉は人に安らぎをもたらすもので、皆は入浴前に身体をきれいにしてから温泉を堪能した。

日 付：11月29日（木）【3日目】

大学名：北京林業大学

氏 名：楊騰紫

今日、私たちはワコール社の見学に訪れた。会社のゲートをくぐるとすぐ小さな「和江神社」を見かけた。その後私たちはワコールの前身が「和江」という名前であることを知った。そしてこの和江神社もまたワコールの守護神である。ワコール社内の博物館では、インナーウェアの発展の歴史について理解を深めた他、消費者の求めるデザインを生み出すためのワコールのたゆまぬ努力の様子も目にすることができた。顧客により良い体験を届けるためだけにワコールは長い年月をかけてたくさんの女性の体型データを集め、製品づくりに役立てている。これはまさに日本で言うところの「モノづくり精神」である。その後私たちは東福寺を訪れ紅葉を觀賞した。東福寺は京都における紅葉の名所で、観光客が多くとても賑やかであった。ここは来た甲斐があり、見渡す限りの紅葉は正に見頃で、古風な庭園と互いを引き立て合い、和風の静寂の美を際立たせていた。通天橋から遠くを眺めると至る所が美しく、心が揺さぶられた。

紅葉の觀賞を終えた後、私たちは新幹線で箱根に向かった。新幹線については二つの印象を持った。一つめはその「速さ」で、セキュリティチェックや検札が不要で、列車自体の本数も多いことから、中国の高速鉄道よりかなり効率的であった。二つめは「空席」で、中国の高速鉄道と比べ新幹線の空席率は高く、待合室がなくとも全く混みあうことがなかった。しかし、車両自体の安定性については高速鉄道が多少上回っていると感じた。

その夜、私たちは懐石料理に舌鼓を打った。だが実のところ懐石料理は見た目こそ良かったが、味については自分の口には合わなかった。その夜最も嬉しかったのは露天風呂で、夜景を見ながらの温泉は天にも昇るような心地であった。

日 付：11月30日（金）【4日目】

大学名：北京大学

氏 名：謝霄鶴

海辺の高速道路に沿って私たちは紅葉に彩られた天成園を離れ、この日の訪問を始めた。その道中、私たちは山や海の美しい景色を楽しんだ他、天候が良かったことから富士山も目にすることができた。和風の美景（ドラマ内のような画面）はこの日のオープニングセレモニーとなった。

私たちの最初の訪問先は JA 全農であった。JA は一般の企業と異なり、同組織は多くの農業生産者の連合組合である。全農は 1972 年に全販連と全購連が合併して誕生した。中国国内の農業従事者が各個に発展するのとは異なり、日本では全農が売買の橋渡し役となり、統一的な調整、発展促進の役割を果たしている。また JA は農薬の安全な残留度合を実現するため、農業機械の操縦者を育成している。また農薬検査では技術と最新の科学研究を結び付けている。中国の現段階の農業生産は比較的立ち遅れている段階であり、全農のモデルには私たちが学ぶべき点がたくさんある。

午後、私たちは東京駅と皇居を見学した。そこは城、水、鴨、宮、黒松と青い宮城が引き立て合い、厳かさや神秘性に満ちていた。その後私たちは伊藤忠商事を訪れた。大企業である伊藤忠商事はファミリーマートなど多くの事業を展開している。その他伊藤忠商事は早くから中国企業とパートナーシップを締結し、「全社員の 4 人のうち 1 人が中

国語に堪能になる」との千人の中国人材計画を行い、「三方よし」の局面構築に尽力している。「ひとりの商人、無数の使命」は伊藤忠商事のコーポレートメッセージである。

その夜、私たちは伊藤忠商事の役員や従業員の代表から熱烈的な歓迎を受けた。東京の夜景が一望できる宴会ホールにて従業員らと踏み込んだ交流を行った。東京で行われている夜8時には必ず退社するとの改革には私自身特に驚かされた。サラリーマンにとってはこうした過度の残業を防ぐ制度は最良のヒューマンケアそして社会的良薬である。同社の多くの従業員は早稲田大学や東京大学といった著名学府を卒業しており、スーツに身を固めながらもとても親切で、私たちに多くの事を紹介してくれた。

夜、私たちは李克強総理が訪日した際に滞在したホテルニューオータニに宿泊し、赤坂一帯からは日本のナイトライフの様子を感じることができた。

日 付：11月30日（金）【4日目】

大学名：北京大学

氏 名：史喬心

あつという間に訪日のスケジュールも約半分を終えた。この日私たちはJA 全農（平塚市）の見学の後、東京へ移動し皇居と東京駅そして伊藤忠商事の見学を行った。

JA 全農の見学では、その運営モデルや遺伝子組み換え食物の問題について積極的な討論をした。JA は農業従事者と販売側の橋渡し役であり、JA の存在により農業従事者は比較的高い収入が保証され、市場の調整メカニズムに問題が発生したり、凶作のため品質が不十分であったりした場合でも買取価格は変わらない。こうした産業チェーン式の組合連合会は農業従事者の権益を大きく保証できるだけでなく、単独での商談や連絡にかかる多くの労働力や物資のコストを省くことができる。中国農業大学の学生らはこうしたモデルについて詳しく質問をしていた。今後の中国の農業は、彼らのリーダーシップの下きつとJA の優れた点に学び、これまで以上に大きく発展すると信じている。

銀杏の落ち葉に彩られた皇居は特別な趣があり、皇室の威厳を引き立たせると同時にロマンチックさも感じられた。暖かい日差しの中私たちは記念写真を撮り、この素晴らしいひと時を記録に収めた。

午後の伊藤忠商事での見学と交流はとても有意義であった。日本で4番目、フォーチュングローバル500の企業である伊藤忠商事のコーポレートメッセージは「ひとりの商人、無数の使命」であり、こうした長きに渡り名声を獲得している商社が私たち大学生のためにこれほど多くの素晴らしい活動を手配し、常に「無数の使命」という企業の社会的責任感を持ち続け、4,285名の従業員の中から中国語を話せる従業員を1,000名育成するといったことは容易なことではない。伊藤忠商事がこれほどまでに成長した要因は、内部の活力と外部との三方よしの関係である。懇親会参加者は皆中国語が堪能であり、これは伊藤忠商事のオールマイティーな人材育成の成果であると同時に、同社の中国との幅広い提携の維持に向けた自信の表れである。

明日はホームステイで日本の人々の生活を実際に体験することができるので、とても楽しみにしている。

日 付：11月30日（金）【4日目】

大学名：北京外国語大学

氏 名：周彩

11月30日は私にとって新たな世界の道が開けた素晴らしい一日であった。早朝、箱根の美しい温泉と滝に別れを告げ、JA 全農と伊藤忠商事訪問へ出発した。

私の視野や知識はあまりにも少なすぎると言わざるを得なかった。私はこれまで全農や伊藤忠商事がどのような組織なのかについて何の知識もなかったどころか、その名前すら知らなかったが、この日の見学を通じて一定の理解をすることができた。

私自身、農業研究等の分野への興味はあまりないが、日本に全農のような組織があることにはとても驚かされた。農業において、農業従事者や農地等ばらばらな要素を統合するのは難しいことであり、アメリカのように機械化管理がしやすいよう農地全体を農場主に任せるのとは異なり、営利を目的とせず、農産品や食品の安全を保証するために全国各地の農産品を対象に検査サービスを行っているという全農の取り組みについて知ることができた。その他どういった種の生産性が高いのか、どういった農薬の残留度合が低いのかについて研究をするなど、全農は自らの努力を続けている。

大型商社である伊藤忠商事に対する最も直接的な印象は何でもやる、というもので、同社への訪問においてもその点を改めて感じた。紡績、機械、金属、エネルギー・化学、穀類・食用油・食品、生活資材そして住宅、情報・金融などその事業範囲の広さは私の予想を大きく超えていた。伊藤忠商事は「ひとりの商人、無数の使命」をコーポレートメッセージとし、「三方よし」を目標に新時代における進化とモデルチェンジを絶えず実現している。特に社会貢献の面では、アフリカ地区における森林保護、文庫事業の実施、電子書籍の普及等に関して貢献を続けている。

今日訪問した二つの企業からはいずれも企業の社会的責任感の重要性を感じ、相応の社会的責任を負うことのみ企業が長きに渡り成長することができるということを知った。

日 付： 11月30日（金）【4日目】

大学名： 北京科技大学

氏 名： 李逸軒

今日私たちは二つの重要な企業を訪問した。午前には JA 全農を訪れ、日本の農業運営及び産業構造に関する知識を学んだ。「全農」は企業ではなく協同組合連合会であり、その会員の農業従事者は全農のサポートの下農産品の加工や販売を行うなど、全農は自家製品の産業チェーンと販売ルートの構築のみならず、農業従事者の社会的地位を高めている。この他、全農はまた「農薬開発」、「肥料性能検査」等に力を入れ、多くの成果を獲得している。全農での学習を通じて、「素人」だった私は科学的角度から日本の農業について一定の理解ができたなど、多くの収穫が得られた。

午後私たちは伊藤忠商事を訪れた。私はこれまで「商事」とは単純に投資会社のことだと思っていたが、スタッフの解説により私は新たな認識が得られ、「開発、貿易、小売り、投資」などを含む大型企業で、非常に多くの事業を展開していることを知った。また伊藤忠商事の経営理念では売り手や買い手への配慮をしている他、さらに社会的責任を担い、「熱帯林再生」や「障害を持つ子どもを対象とした子ども文庫助成」など社会に対して多くの貢献をしていることを知った。その後の同社従業員との交流では、伊藤忠商事の大規模な体制について理解を深めた。正に従業員一人ひとりのひたむきな努力が会社全体をゆるぎないものになっているのだと思った。

二つの企業への訪問では、私自身視野が広がり、多くの収穫が得られた。

日 付： 11月30日（金）【4日目】

大学名： 北京科技大学

氏 名： 張凱集

今日私たちはまず JA 全農を訪れ、ここでは同組織は農業従事者の組合連合会のような組織であることを知った。印象深かったのは JA 全農の組織や形式の多様性であった。JA 全農はとても大型の組織で、中国国内ではこうした組織がなく組合も小さなもので分散している。JA 全農は農業従事者にとって非常に理想的な組織の在り方を私たちに見せてくれた。JA 全農は農業従事者のために新たな技術や生産手段をもたらしている他、販売管理を行うことで、農業従事者が安心して生産に専念できるようにしている。サプライヤーに対しては、JA 全農はまた有料の残留農薬検査を行うことで消費者への食品の安全性保障をしている他、収入源の一つとしている。こうした点について私は非常

に理想的な組織との印象を受けた。JA 全農はこれらをすべて実現しており、中国も JA 全農に学び中国の農業を発展させ、また農業従事者の経済レベルを引き上げるべきだと思う。そして情報の非対称性による巨大な浪費を回避する必要がある。

JA 全農を離れた後、私たちは伊藤忠商事を訪れた。特に感動したのは商社側の応対や紹介そしてスピーチのすべてが中国語で行われたことで、気配りが感じられたと共に身近に感じる事ができた。伊藤忠商事を訪れる前、私は商社という存在についてあまり知識がなく、また伊藤忠商事が実は多くの有名な中国企業と密接な関係にあることも知らなかった。そして今回司会者の紹介を通じ、伊藤忠商事の 4 分の 1 の従業員が中国語を話すことを知ったが、これは中国本土にない企業において実現することは非常に難しく、こうした点からは伊藤忠商事の中国に対する友好的で積極的な提携の姿勢が感じられ、また日本企業と中国企業の提携が広範囲に及んでいることを知った。

夜は伊藤忠商事での懇親会に参加し、一部の若い従業員の普段の仕事や生活の様子について知ることができた。他、彼らが頻繁に中国へ出張し事業についての協議をしている、そして彼らの生活の場である東京の不動産価格は北京や上海同様に高いため、小さなマンションにしか住めず、自身の努力で良い暮らしを実現する必要があることを知った。今日もまた多くの収穫があった。明日のホームステイを楽しみにしている。

日 付：11月30日（金）【4日目】

大学名：北京林業大学

氏 名：冷和華

午前 JA 全農の訪問で、スタッフからの詳しい説明により私はここが企業ではなく世界最大の共同組合連合会であることを知った。JA 全農の運営原則は依存関係の構築をベースに長期的な付き合いをするというもので、これは私のサークル活動にとっても参考となるものであった。全農は農産物の流通において重要な役割を果たすだけでなく、科学技術的にも大きな成果を挙げている。天敵からの保護装置、アンモニア・リン・カリウムの差別化した配合比率による肥料作成等からは、問題への対応について様々な角度から考えることの必要性を学んだ。

午後私たちは伊藤忠商事を訪れた。「いざ、次世代商人へ」のスローガンはとてもインパクトがあった。私にとって最も印象深かったのは「三方よし」の理念である。これはビジネスにおいては売り手、買い手、社会の三者が利益を享受できなければならないとするもので、広大な構図についての価値観と弁証法的知識を示している。スタッフからの紹介で、伊藤忠商事は中信グループ、正大グループと三者提携を行っており、新時代に向けて事業を進化させると同時に、中国市場を非常に重視していることを知った。そして 2015 年から「全従業員の 4 人に 1 人が中国語に堪能になる」との中国人材計画を始動しているといった点について知った時は、私自身両国の未来の密接な交流・提携と自分の未来の可能性について嬉しさを禁じ得なかった。その夜私たちは伊藤忠商事の若い従業員と交流を図った。彼らからは素晴らしい素養と共に極めて優れたコミュニケーション能力と社交能力が感じられた。これらは日本企業の採用条件の一つだと言える。

日 付：12月1日（土）【5日目】

大学名：北京師範大学

氏 名：陳心如

今日からホームステイが始まった。

幸いなことに、ホストファザーの西山さんは中国語ができるため、かねてより WeChat を通じて日本に来てから行きたい場所などについて伝えてあった。本来は将来的に美大を受験する前に試験勉強をするためのアトリエだけを見学する予定だったが、アトリエの見学の際に西山さんが多摩美術大学の関係者に連絡し学校の見学の手配までしてくれた。これは本当に貴重な機会です。西山さんにはとても感謝している。

多摩美術大学の見学はとても感動的で、私自身の目標も固まった。デザイン棟の環境デザインスタジオではとある女子学生が製作途中の紙模型の傍で寝ているのを見かけた。また絵画棟の廊下には画材が積まれ、スタジオの入り口には学生手作りのメンバー紹介や様々な切り貼り絵が飾られ、別の教室からはバンドの演奏練習の音や歌声が聞こえてきた。とても上手というわけではないが、彼らの楽しそうな様子は感じる事ができた。美術大学は大学の中で最も学生の個性を尊重し自由な発展を遂げることのできる場所の一つであり、私は自分の憧れる大学生活を初めて至近距離で感じると同時に、大変な部分と楽しい部分を目に焼き付ける事ができた。これから目標に向けてしっかりと頑張りたいと思う。

西山さん宅での夕食の後は早めに休息をとった。明日の武蔵野美術大学と東京藝術大学の見学を楽しみにしている。

日 付：12月1日（土）【5日目】

大学名：中国農業大学

氏 名：李雨濃

今日はホームステイの初日で、朝9時から私たちは会議室で待機しホストファミリーの到着を待った。これからの2日間のホームステイへの期待が大きかったが、心の中では意思疎通や生活習慣の面での心配から多少の緊張と不安があった。

ホストファミリーは早々に私を迎えに来てくれた。彼らの姿を見た瞬間に私のすべての心配が消えた。彼らの笑顔から、私は言葉が通じなくても楽しい週末を過ごすことができると確信した。その後の交流では思いも寄らずホストファミリーとホストマザーが共に中国での長期間の滞在経験があることを知り、彼らの流暢な中国語に私は完全にリラックスすることができた。

この日、私たちはまずホストファミリー宅に戻り荷物を置いてから観光を始めた。日本のラーメンを食べたり根津神社を見学したりしたが、幸運にも神社で挙式をしている新郎新婦を見かけた。その後は東京の昔からの街並みを散策し、茶道を体験するなど、これらはいずれも私にとっては目新しく楽しいものであった。

最も印象的だったのはホストファミリー宅での夕食であった。一家全員がテーブルを囲み、楽しくおしゃべりしながらおいしい料理を堪能した。息子さんは中国語ができず、英語もまだ学び始めの段階であったが、それでも彼は私と交流しようとするなど、その和やかな雰囲気には私は実家に戻った感覚がした。

日 付：12月1日（土）【5日目】

大学名：北京科技大学

氏 名：劉哲

ホームステイ初日。

今日はホストファミリー宅に泊まるため、朝早くから興奮の気持ちを抑えつつ荷物を片付けホストファミリーとの対面を待っていた。

そしてホストファミリーとの対面では、それ以前にメールを通じて写真をもっていたので、ホストファミリーのお父さんや娘さんそして息子さんをすぐに認識することができた。私のホストファミリーはとても賑やかで優しい5人家族で、東京郊外のマンションで暮らしていた。ホストファミリー宅に入るとすぐに温かい雰囲気が感じられ、ホストマザーはお茶とお菓子を準備してくれて、3人のお子さんは私と一緒にお茶をしながらおしゃべりをした。その後昼食に私が食べたものや、遊びに行きたい場所について彼らから聞かれた私はラーメンを食べたいと答えたところ、彼らは私を連れてラーメン屋に向かった。実は後になって知ったのだが、ホストマザーは午後にパートがあったにもかかわらず時間を作ってご飯や観光に付き合ってくれたのである。

午後、私たちはお寺と植物園に行ったが、この数日の疲れが溜まっていた私は眠くなってしまい、私に昼寝をさせるためにホストファザーは私を連れて帰宅した。昼寝を終えてからは改めてスーパーに買い物に行った。その際私は自分の父親のために茶葉を買いたいと伝えたところ、ホストマザーは私のために茶葉を選んでくれた。私は心から彼らのやさしさと思いやりを感じることができた。

そして最も感動したのは二日目で、12月2日は私の誕生日だったことから、ホストマザーはケーキを手作りし、ホストファミリー全員で私の誕生日を祝ってくれた。これには家族の温かさを感じることができた。

We are family!

日 付：12月1日（土）【5日目】

大学名：北京林業大学

氏 名：劉禹辰

実際に日本の一般家庭における生活を体験できるとのことで今日のホームステイはとても楽しみにしていた。

ホストファミリーの到着を待つ朝の様子はまるで肉親の到着を待つかのようで、片側に私たち30名の学生が座り、もう片側には椅子が30脚置かれ、ホストファミリーが到着するたびに学生を一人連れて行った。

私のホストファミリーは3人家族で、ホストファザーやホストマザーは優しく親しみやすく、また6歳の息子さんがいた。私たちは上野公園に行き、不忍池では蓮の花を見ながらおでんを食べるなど楽しく過ごした。その際私はわさびとからしの違いについて尋ねた。味がほとんど変わらないことからしばらく話し合ったが、色が違う以外に大した違いがないという話になり、宮口さんが言うには、日本人が食べると完全に違うものであることが分かるとのことであった。

はっきりとはしなかったが、私は中国に戻った後引き続き両者の違いについてはっきりさせ、宮口さん一家に知らせたいと思う。

日 付：12月2日（日）【6日目】

大学名：北京大学

氏 名：史喬心

ホストマザーと一緒に住宅街の清掃作業に参加するため、朝8時前には身支度を済ませ、その後手袋をしてビニール袋片手に住宅街全体のごみ拾いをした。静流ちゃんや子龍くんも参加し、楽しみながら地面の隅々までチェックをし、同様にゴミ拾いをする他の家庭に出会った際は互いに笑顔で「おはようございます」とあいさつをするなど、とても友好的で楽しい雰囲気の中で活動が行われた。

齋藤さんの家は遠いことから、この日私たちは都内での活動はせず、彼女たちと共にスーパーで食材を購入し、また近辺の日本的な建築物の写真を撮るなどした。戸田の街路はとても静かで歩行者や車すらも少なかった。和風の邸宅の傍ではみかん色の柿と木造の屋根が互いを引き立たせ、日本の秋の穏やかさと静けさを醸し出していた。時折鳩や雀が飛んでいく様子は、さながら東方の庭園の風情であった。

ホストファミリー宅に戻ってからは、静流ちゃんに折り紙を教わり、私も齋藤さんにプレゼントした武夷山岩茶や骨刻の菩薩そして中国語書籍の由来や意味合いについて紹介した。齋藤さんは気に入ったと言ってくれたが、子龍くんや静流ちゃんは「怖い」、「好きじゃない」と言っていたため私も最初は戸惑ったが、齋藤さん曰く彼らの年頃の子供は時折思っていることと反対のことを言い、日本語にはそうしたことを指す「天邪鬼」という言葉があると教えてくれた。こうして私たちは日本と中国の文化におけるユニークな物語についてたくさん語り合った。

たくさんの人がいる中での出会いは縁であり、国境を跨いでの出会いは尚更である。2日足らずの時間だったが、私は自分の目で日本の一般家庭の実際の様子を目にし、そして体験することができた。お別れの際は互いにとても名残惜しく、次の再会を約束した。子龍くんや静流ちゃんはエレベーターまで追いかけて、小さな手を振りお別れをして

くれた。これらすべてがあっという間だったが、また素晴らしいものでもあった。

日付：12月2日（日）【6日目】

大学名：北京師範大学

氏名：金欣

今日はホームステイの二日目である。

ホストファザーやホストマザーから行きたい場所について聞かれた私は、考えるよりも先に「書店」に行きたいと口にしてた。かねてより私は今回書店に行きたいと思っていた。と言うのも、中国では日本の書籍の購入が困難だからである。私たちは書店で1時間ほど見て回ってから急いでホテルに向かった。お別れの際は寂しさもあったが、きっと再会できると信じている。

今回私は初めてのホームステイで、坂田さん一家も初めてホストファミリーとなったが、私たちは楽しい時間を過ごすことができた。

昨日のスケジュールはとても充実していたため、昨日の日記の中にはすべての感想を書くことができなかった。昨日の午後は彼らの娘さんとその生後半年の息子さんに会いに行ったがとても可愛かった。その他には夜に帰宅した際に彼らの飼っている猫を見かけたが、私はこれまで動物を飼ったことがないのでとても嬉しかった。

日付：12月2日（日）【6日目】

大学名：北京師範大学

氏名：陳卓

昨晚岡村さん夫婦とおかゆは中国人の好きな朝食の一つだという話をしたところ、思いがけずこの日の朝食にはおかゆを食べることができた。岡村さんの奥さんはまた中国四川の豆板醤を使い前菜を作るなど、実家にいるような感覚を与えてくれた。昼食の際、岡村さんはまたステレオで私の好きなアニメの歌を流してくれた。

昼食の後、ホテルに戻る時間となった。その際ご夫婦は私のためにお菓子を買ってくれた。これには私自身が至れり尽くせりの世話を受けている子どものような感じがした。

お別れの時になり、岡村さん夫婦は私としっかり握手をし、日本語の勉強を頑張るよう励ましてくれた。

ホームステイの二日間では、日本を十分に堪能し、日本をより知ることができた。

日付：12月2日（日）【6日目】

大学名：北京外国語大学

氏名：董林

一期一会。

ホストファミリーとの出会いはこの数日間で最も感動的な出来事であった。ホストファザーやホストマザーは私にとっても良くしてくれた他、大声で叱責することのない和やかな家庭の雰囲気には私は久方ぶりの温かさを感じた。朝はホストマザーと私たち三人の子どもと一緒に朝食をとったが、私がアイドルグループの嵐が好きなのを覚えていたホストマザーは昨晚の嵐の特別番組を改めて流してくれた。そして息子さんたちとテレビを見ながらおしゃべりした後、昼食を食べに出かけた。

近く中華料理店では中国人が作る担々麺が売られていた。「成都たんたん麺が好き」という息子さんの笑顔に私は長い間あっていない自分の弟を思い出した。日本で日本風味の中華料理を食べるのも面白いと思った私は「日本のものは全部甘い」との先輩の冗談半分の言葉を思い起こしたが、麻婆豆腐の丼を食べた際にはその言葉の意

味を実際に体感することができた。

昼食の後はホストファミリーと一緒に近くの古本屋へ向かった。「自分のいらない本を売り、他の人に比較的安いコストで知識と喜びを得る機会を提供する」というコンセプトについて、私は中国でもこうした方式は可能なのではないかと考えさせられた。日本において至る所で見かける古本屋、中古車店そして古着店等は日本人の物を大切にするという本質を反映している。では中国人は日本人のこうした点に学ぶことができるだろうか？もし可能なのであれば、省エネ・環境保護の分野で中国人はこれまで以上の成果を出すことができるだろう。

お別れの際、ホストマザーと二人の息子さんは私をホテルニューオータニまで送ってくれた。そしてずっと抱きしめたかった息子さんを抱きかかえた時には涙がこぼれそうになった。また会える。

きっと。

日 付：12月3日（月）【7日目】

大学名：中国農業大学

氏 名：康慧薇

今日は最終日の一日前で私たちはまず日本で最も歴史の古い金融グループである三菱UFJ銀行に向かった。同グループの金融面の實力はとても強く、その傘下には銀行、信託、証券、リース、消費者金融等様々な金融形態の会社があり、その多くは業界のトップにある。またこうした強大な實力の裏では常に様々な方面の人材を受け入れており、日本だけに限らず、中国ひいては世界に向けたグローバル戦略を有している。

その後私たちは日比谷松本楼を訪れた。ここでは日本の西洋式公園の見学のみならず、歴史の背後にある孫中山氏と宋慶齡女史との愛情や梅屋庄吉氏と夫人による孫中山氏らへのサポートといった日中友好の物語についても知ることができた。日本と中国の付き合いについては本当に遙か昔まで遡ることができ、松本楼であれその他の企業であれ、いずれも両国の友好関係が感じられた。

今日の三つめの目的地は中国大使館であった。ゲートをくぐるとすぐに親しみが感じられた。外で長い期間を過ごした後にパンダ、梅の花、中国画等の中国的要素を目にするとひと際親しみが感じられ、学生らそして大使館側のスピーチもとても感慨深いものがあつた。日本では多くのものに驚きと感動を覚えたが、自身の身分や使命については常に忘れず、自分の源はどこにあるのかについては強く自覚していた。こうした心に植え付けられた文化的共通認識や愛は、どのような衝撃でも揺らぐことはない。私は終始中国人であり、終始「国民生活における多くの問題の解決」を自分の任務としている。

今日の最後の目的地は東京大学であった。日本でトップの大学では交流に参加した学生の英語レベルが非常に高く、自分の予想をはるかに超えるもので、また討論のテーマもより深かった。私たちはAIの話題について討論し、AIは人の作業を代替できるが、永遠に人類を代替することはできないとの意見で一致した。皆との討論や各グループの様々な意見を耳にすることで、自分自身多くの収穫が得られた。

日 付：12月3日（月）【7日目】

大学名：北京科技大学

氏 名：劉伊迪

今日はまず初めに三菱UFJ銀行を訪れた。印象深かったのは同銀行の新入社員に対する研修の方法であった。中国国内のそれとは違い、同銀行における研修は全面的で、また実践と融合したもので、学校のようなあらゆる面からの指導方式であった。また日本企業では「常に相手の立場で考える」ことが求められ、他者のためを出発点とすることは私たちが学ぶべきものである。それと、大学生の期間に成し遂げたもしくは一生懸命行ったことがあるかといった、

彼らの人員採用に関する要件についても私個人として多くを考えさせられた。

お昼は日比谷松本楼を訪れ、梅屋庄吉氏の孫中山氏への様々な支援についてのお話を伺い、日中両国間の深い友情を感じた。

その後私たちは中国大使館を訪れた。律公使参事官のお話を通じて、将来的に日中両国は金融提携や一带一路等より幅広い提携が可能なることを知った。また同時に私自身なぜ日本に来たのか、日本で何が学べるのか、学んだ知識をどのように自分自身に活かすのかといった問題について、これまで考えたことがなかったことに気が付いた。これから先、それらの答えを見つけられると信じている。

この日の四つめの訪問先は東京大学であった。グループ討論では、日本の大学生はどのようにテーマを設定するかなど、討論会について熟知していて、私たちはこうした討論に参加することはほとんどないことに気付かされた。また東京大学の学生はそれぞれ自らの観点を明確に表現できるなど、英語のレベルがとても高いと思った。これには私も英語のレベルをより高めなければならないと思った。それから私は東京大学法学部の大学院生の萌美さんと知り合い、普段の生活や学校の話など互いに語り合うなどとても楽しい一日だった。

日 付： 12月4日（火）【8日目】

大学名： 北京大学

氏 名： 陳燕瓊

今朝はホテルニューオータニのマネージャーとスタッフの案内の下、同ホテルのエコ施設を見学した。

まず初めに私たちは汚水処理の作業場を訪れ、そこではホテル全体の建築図面から全体的な構造を把握し、汚水の処理や循環の作業場では汚水が処理された後にトイレの洗浄や庭園での散水に再利用されていることを知った。木製の飲用水の貯蔵容器は殺菌や防震の効果があり、製造費用こそ高いものの利用可能な時間はより長くなっている。

その後、私たちはごみ処理場を訪れ、ごみの分類の様子を目にし、さらに生ごみを肥料にした後で提携農家に提供しウィンウィンを実現している状況について知った。

最後に日本庭園を訪れ美しい景観を楽しんだ。日本庭園と中国の園林の違いは、中国の園林は地形を活かし、それに人為的な景観を加え自然との融合を目指し「それぞれの場所で風景が異なる」、「それぞれの場所が絵画のようである」といった効果を実現しているのに対し、日本庭園は自然の成長を重視し、人為的なものがなく、鮮やかで自然な景観を実現している。

帰国の途に就く前には歓送会が開かれ、各団員からの感想の発表や、先生方そして主催者側の代表者からのあいさつがあるなど、会場はとても感動的な雰囲気であった。特にホストファミリーの皆さんが手を振りお別れをしてくれた際や、中島ガイドや横山さんと空港でお別れをする際は私たち皆が涙を流した。

その他にも、伊紗お姉さんとののんびりした時間、私が体調を崩した時の中島ガイドの気遣いそして横山さんから私の英語力に高い評価を頂いたことなどは、今でもはっきりと覚えている。

日本での旅はたくさんの収穫があり、恩義や感謝などずっと記憶に残るものとなった。

日 付： 12月4日（火）【8日目】

大学名： 北京外国語大学

氏 名： 劉娜

今日は訪日の最終日。時間が経つのが本当に早く、全てのことについて始まったばかりでまだしっかりと体験しないうちにもう終わりを迎えてしまい、とても名残惜しく思っている。午前はずっとホテルニューオータニのエコ施設を見学した。東京での数日間私たちはホテルニューオータニに滞在したが、ホテルの環境がとても美しいと共にサービスもとて

も素晴らしかった。同ホテルは営利のみを追求するのではなく、環境保全の面においても汚水処理などで大きな貢献を果たしており、関連施設を見学した私はホテルニューオータニのこうした素晴らしい取り組みに大きな衝撃を受け、中国国内のホテルもホテルニューオータニに学ぶべきだと思った。

この日最も忘れ難くまた辛かったのは歓送会であった。歓送会には私のホストファザーやホストマザーも参加してくれた。本来ホストファザーはこの日仕事だったが、私を見送るためにわざわざ仕事を休み、二人の娘さんを連れ遠い千葉から駆けつけてくれた。これには本当に感動しお別れがとても名残惜しかった。そしてホストマザーは、来年私が留学に来る際は事前に連絡してくれれば空港に出迎えに行き、彼らの自宅で数日過ごしてから私を学校まで送り届けるという言葉をかけてくれた。わずか1日半の時間で彼らとこれほど深い関係になれるとは思っていなかった。彼らが私を外国人や赤の他人と見なすことなく、家族のようにそして彼らの娘のように接してくれたことにはとても感動した。今回のホームステイは私にとって初めてであったが、貴重な経験そして忘れ難いものとなり、ホストファザーやホストマザーには心から感謝している。この他、歓送会での各団員の発言もまた印象深いものがあった。本来は各大学から代表者1名が発言をする予定だったが、皆が発言したいとのことで全員が発言をした。皆の話す感想からは私自身多くの収穫が得られた。また今回の訪日では見識を広めることができ、多くの素晴らしい友人ができ、自分の将来についてより多くを考えるようになった。この活動はとても意義深いものであり、参加できたことを光榮に思っている。

日付：12月4日（火）【8日目】

大学名：北京林業大学

氏名：靳松

時の経つのは早いもので、最終日があつという間にやってきた。午前はホテルニューオータニのエコ施設を見学したが、その施設の素晴らしさに衝撃を受けると共に心の中では「すごい」の一言であった。ごみ処理の場所ですらも嫌な臭いはあまり感じられなかった。自分の予想していたものとは完全に違って、水処理の場所では、1999年に作られた木製の樽を現在でも問題なく使用していた。ホテルニューオータニではまた生ごみを有機肥料に再生し農家に提供した後に、その農家から野菜や果物を買付けるといった好循環を実現している。だが最もすごいのは、ホテルニューオータニがこうした好循環を実現できる能力を有していることである。エコ施設の見学の後は、同ホテルの400年以上の歴史を持つ日本庭園を見学した。浜離宮恩賜庭園とホテルニューオータニの日本庭園の見学を通じ、私自身日本庭園への実感がより深くなった。

その後は歓送会となった。歓送会という名ではあるが、参加した多くの学生は名残惜しさから涙していた。歓送会には三井さんも足を運び、私たちは来年に再会する約束をした。

この8日間は短かったものの、とても印象深いものとなった。日本に来る前は将来的に日本へ留学しようか迷っていた。しかし今回の機会を通じて大学三年生（翌年）は日本で一年間交換留学をし、日本をより深く体験したいと思っている。

この他、今回の日本訪問では中国と日本の違いについて強く感じた。こうした違いについてどのように理解し、どのように向き合うのかについては今後私たちが考えていかなければならないことだと思う。

最後に、中国日本商会、日中経済協会そして中日友好協会の皆様に感謝いたします。有難うございました。来年日本でお会いしましょう。